

小麦情報

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

No.5

Tel. 018-860-3410

Fax. 018-860-3834

適期追肥と病害虫防除で高品質な小麦生産を！

1 気象経過

アメダス大湯

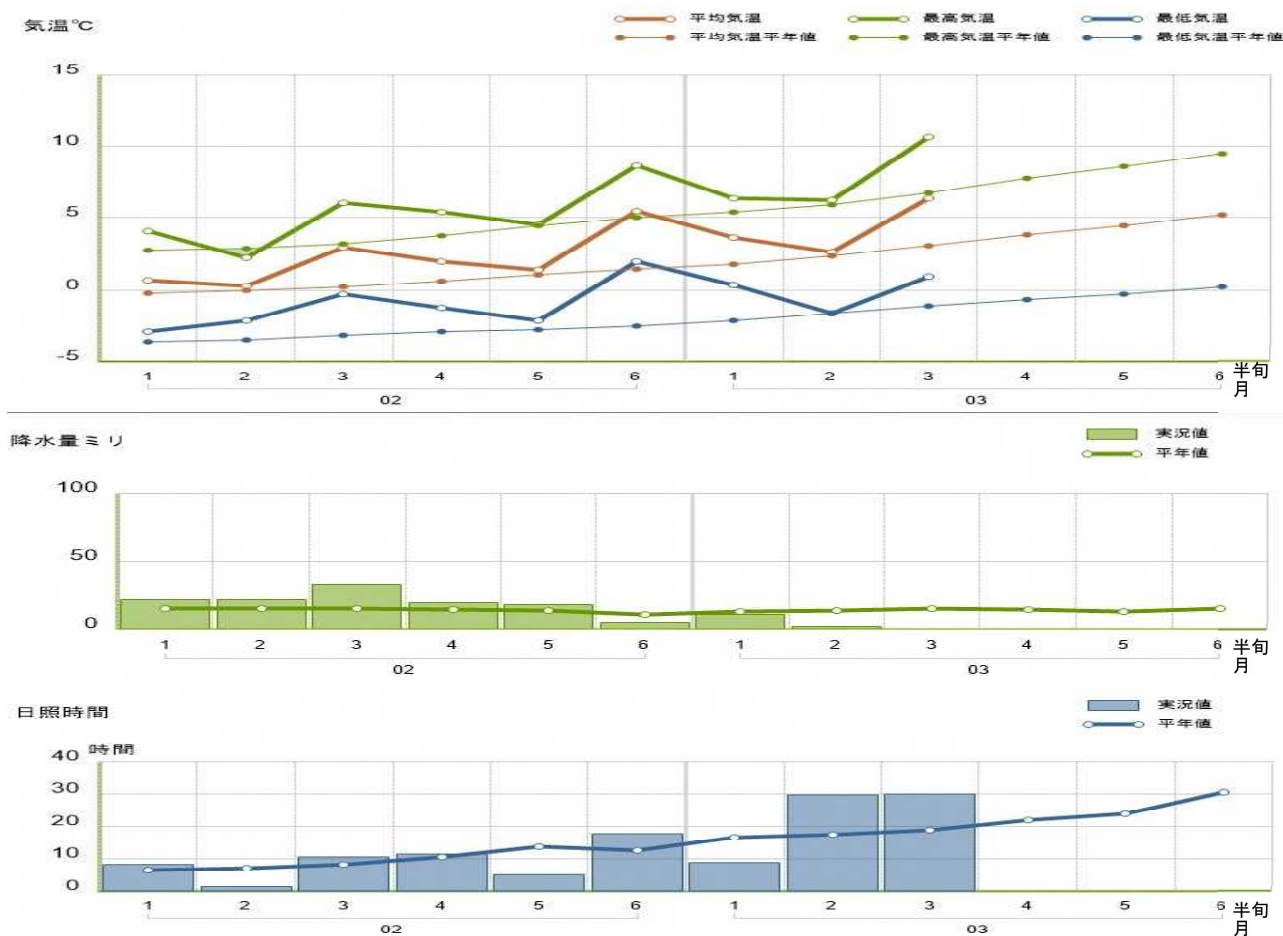


図1 半旬ごとの気象経過(2025年2月～2025年3月3半旬)

〈概況〉

2月以降は、気温が高く、降水量は平年並の気象経過となりました。暖冬傾向の気象経過で雪消えが早く、小麦の生育が旺盛になり、生育後半に肥料が不足することが懸念されます。適期追肥により、生育後半の肥料不足を防止し、収量・品質の向上に努めましょう。また、追肥のタイミングや量を誤ると倒伏や品質の低下を引き起こす可能性があるため、注意しましょう。仙台管区气象台から3月13日に発表された1ヶ月予報(3月15日～4月14日)では、降水量はほぼ平年並の見込みで、気温は1週目が低く2週目以降は高くなる見込みとなっています。今後の気象経過や小麦の生育に注意しながら栽培管理をしましょう。

2 R7年産の生育状況

- ・ 3月15日の生育調査結果（銀河のちから）は、草丈18.1cm（過去5年平均比121%）、茎数1,065本/㎡（同比123%）、葉数9.4葉（同差+0.5葉）となりました。草丈は平年よりも長く、茎数は多くなり、葉数はやや多くなりました。
- ・ 今年度の根雪期間が42日（平年57日）でやや短く、根雪終了日が1月24日（平年2月26日）で早くなりました。それに加えて、越冬前の生育が旺盛だったため、草丈が長く、茎数が多くなったと考えられます。
- ・ 調査したほ場では、テグスの設置や旗の設置などの鳥害対策を実施しており、鳥害の発生はあまり見られませんでした。

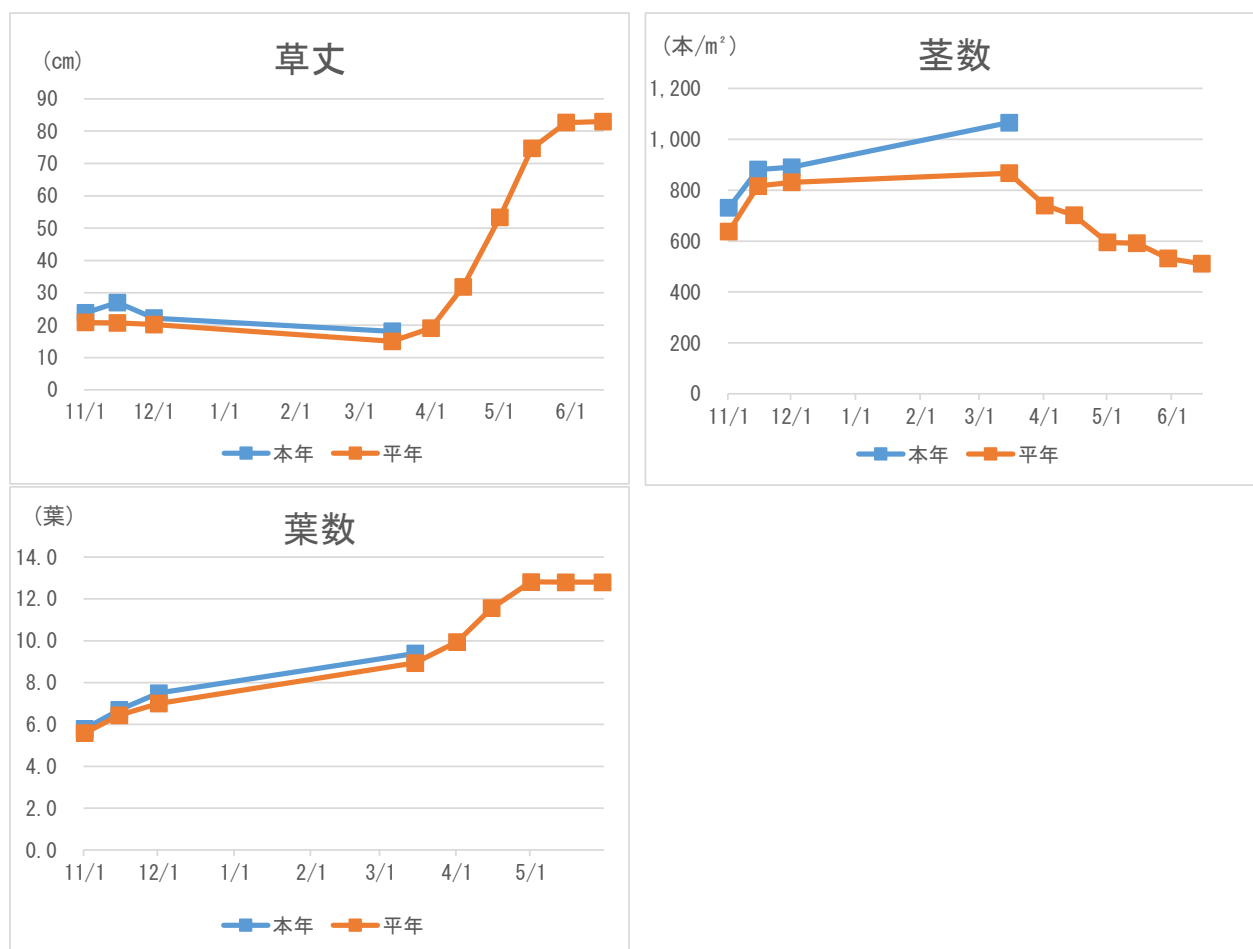


図2 令和7年度産小麦の生育状況の推移(「銀河のちから」4地点平均)

※1 平年値はR2～R6の平均値

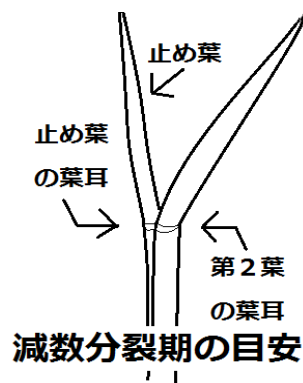
3 当面の管理

(1) 追肥

①幼穂形成期追肥

(1)小穂分化後期追肥（幼穂 1 mm期、3 月下旬～4 月上旬）

- ・小穂分化後期追肥は、1 穂小穂数・小花数の増加効果があります。小麦の穂は、将来的に 1 粒の小麦になる小花が複数集まった小穂を左右に10個程度付けたもののため、1 穂小穂数・小花数の増加は収量の増加に直結します。
- ・追肥は、茎数が1,500本/m²を超える場合やSPAD値が50以上の場合は控えてください。また、時期が遅れると節間伸長期の直前になってしまい、倒伏する恐れがあるため、施肥量や施肥時期に十分に注意してください。



(2)穎花分化期追肥（幼穂 5 mm期、4 月中～下旬）

- ・穎花分化後期追肥は、1 穂着粒数の増加効果がみられます。湿害等により葉色が薄い場合（SPAD値が45以下）は尿素を窒素成分 2 kg/10a程度追肥してください。

②減数分裂期追肥（葉耳間長± 0 cm、5 月上旬）

- ・減数分裂期追肥は 1 粒重を増やし、タンパク質含有量を高める効果があります。葉耳間長± 0 cmに達した頃（減数分裂期、出穂10～7 日前）に実施します。
- ・施肥量は窒素成分で 2 ～ 4 kg/10aとします。ただし、草丈が長い場合や葉色が濃い場合には、倒伏しないように、施肥量を調整してください。
- ・減数分裂期追肥が遅れると、子実品質が低下したり、粉色が悪くなるため適期追肥を行ってください。

(3) 雑草対策

- ・ほ場の状態を確認し、必要に応じて防除を行ってください。

〈小麦栽培の除草剤〉

薬剤名	対象雑草	薬量	散布量	使用時期	使用回数
ハーモニー D F	一年生広葉雑草	7.5～10g/10a	100L/10a	3 葉期から節間伸長前	1 回

〈使用上の注意〉

- ア) 雑草の茎葉が濡れるように均一に散布する。
- イ) 周辺作物へ飛散させない。
- ウ) 散布後、完全枯死までにはほぼ 1 か月かかる。
- エ) 散布に用いた農機具の洗浄を丁寧に行う。
- オ) 春散布は 3 月下旬～4 月上旬に行う。
- カ) 本剤の使用回数は 1 回のため、秋散布をした場合は春散布できない。

(4) 病害虫防除

○赤かび病防除

- ・ 赤かび病は開花（5月下旬頃）が始まってから10日程度の間が最も感染しやすく、この間に降雨が続く、気温が高いと多発します。薬剤による防除は開花始期に1回目の散布（シルバキュアフロアブルまたはストロビーフロアブル）を行い、1回目の散布から7～10日後に2回目の散布（同剤以外の薬剤）を行います。 開花始期に1回目の薬剤散布ができないと予想される場合は、早めに散布してください。
- ・ ほ場間での生育差が大きい場合はよく観察して適期防除に努めてください。
- ・ 耐性菌を出さないため、RACコードが1、3、11の薬剤は連用を避けてください。
- ・ 菌糸や胞子が種子に付着し、次作の伝染源となる恐れがあるため、発病が確認されたほ場では採種をしないでください。

※赤かび粒の混入が0.0%を超えると農産物検査規格において規格外となります。また、同病で発生する毒素（DON（デオキシニバレノール））が1.0ppmを超えると食用小麦として販売できなくなります。

◆赤かび病防除使用薬剤

RAC コード	薬剤名	希釈倍率 (10aあたり)	散布量 (10aあたり)
1	トップジンM粉剤DL	4 kg	－
M2	イオウフロアブル	400～800倍	100～150L
3	シルバキュアフロアブル	2,000倍	
11	ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	
M2/UN	石灰硫黄合剤	50～60倍	
M2/UN	OAT石灰硫黄合剤	100倍	
1	トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	

○さび病

- ・ 春から初夏に好天が多い年、暖冬の年に発生が多いとされています。収穫後のこぼれ麦で越冬して秋の発生を招き、翌春の発生を多くします。発病が見られた際は下記の薬剤を参考に防除をしてください。耐性菌の出現回避のため、RACコードが3、7、11の薬剤の連用はしないでください。

◆さび病防除使用薬剤

RAC コード	薬剤名	希釈倍率 (10aあたり)	散布量 (10aあたり)	散布時期及び回数
M 2	イオウフロアブル	400倍	100～150L	発病初期から蔓延期 2～3回
3	シルバキュアフロアブル	2,000倍		
11	ストロビーフロアブル	2,000倍		
M2/UN	石灰硫黄合剤	40～140倍		
7	バシタック水和剤75	1,000～1,500倍		

※シルバキュアフロアブル、バシタック水和剤75の使用回数はそれぞれ2回以内。

○うどんこ病

- ・春から初夏にかけて温暖・多湿の時に発生が多く、厚播や多肥、過繁茂のほ場で多発します。発病が見られた際は下記の薬剤を参考に防除をしてください。耐性菌出現回避のため、RACコードが1、11、50の薬剤の連用はしないでください。

◆うどんこ病防除使用薬剤

RAC コード	薬剤名	希釈倍率 (10aあたり)	散布量 (10aあたり)	散布時期及び回数
M 2	イオウフロアブル	400倍	100～150L	発病初期から 2～3回
50	カッシーニフロアブル	3,000倍		
11	ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍		
M2/UN	石灰硫黄合剤	40～140倍		
1	トップジンM水和剤	2,000倍		